

## 近代の国語科教材と「西鶴」観の変化

——教科書指導書等の教材観と作品受容——

大久保 順 子

戦前の中等学校及び戦後の高等学校の国語教科書の教材となった西鶴作品について、先行研究<sup>①</sup>の指摘に対していくつかの教材例を追加しつつ、教科書に利用された本文の調査をもとにその性質を考察してきた<sup>②</sup>。これらの教科書を補う文献として、当時の教授者用<sup>③</sup>国語科教師用に刊行された「教授要領」や「省勞抄」<sup>④</sup>等の名称をもつ「指導書」も存在する。その言説には、大正<sup>⑤</sup>昭和初期頃に西鶴作品が次第に国語教材に採用されていく状況の中での、中等学校の国語科における作品読解のメソッドやそのレベル、さらには西鶴作品を「どう読み解き」、かつ「どう読ませようとしたか」という指導者側の企図が窺われるのである。先の論考<sup>④</sup>では、西鶴作品教材化の要因の一つに、明治期から昭和初期にかけての国語科教授要目やカリキュラム構成の変化の影響がある、という見通しを得た。その経緯の重要な転換点は、概して次のポイントに整理しうると考える。

- 〔1〕 明治四十二年の国語科「国文学史」科目の制度上の廃止
- 〔2〕 大正期の「文学教育」志向の高まり
- 〔3〕 昭和初期の「日本古典の教材」教育の強化

近代の国語科教材と「西鶴」観の変化

本稿ではこの視点をもとに、当時の教科書と教授指導書の解説部分等を参照し、教材化の様相の具体的な検証を試みる。そこからさらに、西鶴作品の受容の経緯と行方についても考えてみたい。

## 一 「国文学史」教科書及び指導書解説の「西鶴」観

国語教科書やその指導書解説は、その当時の指導教材に対する作品観・作家観が如実に反映された資料として意義深い。とりわけ西鶴作品に関しては、戦後特に昭和二十年代の暉峻康隆『西鶴評論と研究』（＝所謂〈暉峻西鶴〉の読み）以降の研究史での共通認識とはやや異なる、それ以前の研究者の「西鶴」の作家観や作品観が窺われる。それらの言説に表された認識は、明治期以降の文学研究における西鶴文学の評価と連動するものとみることができよう。まず、前掲の〔1〕以前の時期、すなわち国語科に「国文学史」科目の存在した明治三十年代までの教科書や指導書等の例から、西鶴に関する文学史的記述について参照を行う（以下、引用箇所は傍線は引用者に拠る）。

A徳川時代の小説の沿革を云はば（中略）特に其の最も進化したる文化、文政、天保間に流行せる四種の小説に付きて述ぶべし。即ち第一、讀み本、第二、草雙紙、第三、滑稽もの、第四、人情本なり。但し是より前、貞享元禄の頃大坂の井原西鶴といふもの一種の小説を作りしが、一部の趣向を立つることなく、唯篇を追ひて當時の人情世態、言語衣服を細かに寫せり、其の筆艶にして且輕し。尋いで京都に八文字屋自笑、江島屋其碩（其碩）あり。其の小説略西鶴の體に似たり。是等を元禄小説と稱し、後世或は之に倣ふものあり。故に四種に先だちて此に西鶴の文少しばかりを擧ぐべし。

一とせ松島に行きて、初めの程は横手を拍ち、見せばや、爰、歌人詩人にと思ひしに、明け暮れ眺めて後は千島も磯臭く、末の松山の浪も耳にかしましく、（中略）……此くの如く人の妻も夫の手前たしなむうちこそまだしもなれ、後は（以下略）

（第九章 徳川時代の二（通俗歌文）新保馨次『中學國文史』、金港堂、明28・12）

B 此時代に於ける小説文の流行は、頗るその隆盛を極めたりき。その始期に行はれたるものは、浮世草紙、または洒落本と稱して、淫靡なるもの多く、その脚色また見るに足るものなかりき。されどその卑俗なる所は、即ち此時代の平民文学を形成せる所以のものにして、文學趣味の普及は、これによりて養はれたるなり。またその文章の巧妙なる點も、須らく一顧すべき價值あるものなり。井原西鶴、江島其磧、八文字屋自笑等は、この派の最なるものなり。西鶴の文、特に著る。その輕妙にして、勢ある文章と、その觀察の銳利なるとは、實に驚歎するに耐へたるものなり。近松と共に相併んで、元禄時代の雙美と稱せらる。たゞその材料の淫靡にして、讀むに堪へざるもの多きは、頗る惜むべしとなす。西鶴は俳諧にも長じたりといふ。その文、俳諧に負ふ所多きは、前に云へるが如し。此等の淫靡なる小説は、一時幕府の禁ずる所となりて、殆んどその跡を絶ち、歴史小説または滑稽なる小説、行はれたり。

〔第六章 江戸時代の文學〕、内海弘藏『中等教科日本文学史』、明治書院、明33・3）  
C 當期に至りては、その發達著くして、各種の著作續出せり。その種類には、まづ浮世草子、洒落本、人情本、草雙紙、實録物、讀本、滑稽本等あり。作者は、元禄以前に、井原西鶴ありて浮世草子を作り、世の喝采を博したり。その他、(中略) 浮世草子、洒落本、人情本は、全く當時の浮華驕奢なる風俗を、描寫したるものにて、その書中の骨子とする所、おほく放蕩無頼の男女ならざるはなく、卑猥なること、殆ど見るに勝へざるものあり。されば當時、風教を害する甚しかりしを以て、幕府は、一時、この種の小説を禁ずるに到れり。

〔第六編 江戸時代の文學〕、弘文館(吉川半七代表)『中學國文學史』弘文館、明35・11訂正再版)  
A、Cの三例は、いずれも「国文学史」に関連した当時の文献の、江戸時代の「小説」と「西鶴」に関する箇所である。東京高等師範学校教授の新保磐次のA『中學國文史』は、「徳川時代」の「小説」のうち「最も進化したる文化」を文政・天保期の讀本や人情本等とし、西鶴作品をそれに先立つ「一種の小説」と位置付け、その特徴を「當時の人情世態、言語衣服を細かに寫」す点、筆致の「艶にして且輕し」の点とみる。と同時に、「好色一代女」卷三の一「町人腰元」の文章を引用し、西鶴の「好色物」作家のイメージを象徴させている。国文学者で歌人の内海弘

蔵のB『中等教科日本文學史』や、弘文館のC『中學國文學史』では、ジャンルを「浮世草紙」とし、いずれも「輕妙」さや「當時の風俗」の「描寫」を評價する一方、「淫靡なる」「卑猥なる」作品であるため「一時幕府の禁ずる所」となったと説明する。当時の文献では他に、次のような言及の例もみられる。

D 西鶴は紫式部と同じやうに寫實的に腐敗した社會を寫し出したのです。その筆は透徹せざることなしといふ有様で、如何にも精細によく寫して居りますが、惜しいことにはその文章には何となく輕佻浮薄な風があつて神韻といふものに乏しい。随つて人の同情を惹起すといふ力は薄いやうです。

〔第八講 近世文學の一、芳賀矢一『國文學史十講』、富山房、明32・12〕

E 其の著作には『一代男』『二代女』『五人女』『武道傳來記』『日本永代蔵』『世間胸算用』『俗つれぐ』等傑作と稱せらる。其の筆録銳利にして、能く人生の秘奥を穿つところ、優に本朝文學の一大家たるに足るものあり。但し、其の傑作中には、寫實の極、文辭猥褻に涉りて讀むに堪へざる節多し。

〔第六編 江戸時代の文學』、和田萬吉・永井一孝『國文學小史』教育書房、明32・12序〕

それぞれの言説の「国文学史」の概念に、当時の作家観や作品観が反映されている。帝國文庫本『西鶴全集』発禁事件<sup>6</sup>が発生したのが明治二十七年七月である。西鶴『非「雅」かつ非古典的にして、好色物の「淫靡」や「輕佻浮薄」たるイメージは、明治三十年代の「国文学史」科目の教科書の「国文学史」に概観される形で、その教科書で指導する教師と学ぶ生徒にも、一般的な西鶴像として伝わつたであらう。このような明治期の当初、中等学校国語教科書において、西鶴作品は文学史的に言及はされていても、作品本文の實際の採用例はほとんどみられない。

だが、明治期の古文古語偏重を批判し日常的な作文教育等の重視の志向に向かつて国語科教育のカリキュラム編成<sup>6</sup>によって、明治四十二年に「国文学史」科目は制度上廃止された。その後、従来「国文学史」科目が教えていた文学的事項は、国語科の読本的教材として採用される「作品」そのものの講読の学習の中で指導されることとなった。〔1〕の明治末から〔2〕の大正期にかけて、近代小説的観点から「小説」「文学作品」としての西鶴作品の再評價が進む。竹野静雄の指摘<sup>7</sup>のごとく、明治三十〜四十年代頃から、西鶴に関する硯友社や自然主義の作家たちの言

及は、内田魯庵・尾崎紅葉・幸田露伴等をはじめとして次々と増えていく。出版界でも西鶴文学の翻刻化が進み、好色物以外の町人物や武家物を含む諸作品の本文を享受しやすいテキストが普及し出している。<sup>(8)</sup>西鶴浮世草子の全体が小説という「文学」として認知されていく時期であり、かつて「国文学史」科目の教科書が概説していた「淫靡」「輕薄」な好色物作家という西鶴のイメージが、徐々に変化し始めていく頃ではなかっただろうか。ちょうど国語教育界で「文学教育」の動きが高まる時に、まさに「文学」として評価され始めた西鶴作品本文が、教材に採用され始めるのである。

「浮世草子」というジャンル名が定着した明治三十年代後半には既に、「好色物」の内容の「猥褻」という評価に留まらず、様々な世界を描く「西鶴小説」群の「筆録」「描寫」方法への評価も始まっている。次のFの例はその一つである。

F 或者は曰く、西鶴の小説は甚だ淫靡なり、士君子たる者の玩賞すべからざるものなり、風俗を壞亂するものなり、年少者をして邪道に陥らむるものなりと、これ最も有力なる攻撃にして最も普遍的なる攻撃なり。されどこの攻撃の有力なりといふ所以は、文學者以外の多數の人より發せらるゝものなるが故なり、(中略)かの武家義理物語、胸算用、本朝櫻陰比事、等の書の意味が、一代男、五人女等の意味と反對にして作者の主張はいづれにあるかを疑はしむるは、大に西鶴の為に注意すべき點ならずや、一方に正を寫して一方に邪を寫し、一方に美を描きて一方に醜を描く、其の西鶴の西鶴たるところの那邊にあるかは、精讀すれば自ら明白なるが如し、(以下略)

第一高等学校教授で俳人でもある沼波の右の論説は、西鶴作品を「淫猥」とする攻撃が(恐らくは好色物による先入観に囚われた)「文學者以外」からのものであると反論し、「正」と「邪」、「美」と「醜」といった、一面的ではない物事の両面を対象把握するという、西鶴浮世草子全体に共通する性質を指摘している。文体表現面の西鶴の文章の特徴については、「第一、てにはを略せる事／第二、詞と地文との間に「と」を略せる事／第三、詞と地文とを打ち違ひに重ねたる事／第四、前句と後句とを打ち違ひに重ねたる事／第五、前句完結せずして後句に續ける事

／第六、常に其語に随伴する語を以て其語の代用となせる事／第七、短句にして至妙なるもの多き事／第八、文末に輕き短句を於ける事／第九、突然「枕詞」を挿める事／第十、突然漢語を挿める事／第十一、かけ聲を挿める事／第十二、和歌和文を變形して引用せる事／第十三、漢詩漢文を變形して引用せる事／第十四、文法を破れる事／第十五、かけ詞の事／第十六、新造語の事／第十七、後の文學に趣向を與へたる事」とする。この言説については、「俳諧連想（いわゆる觀念連想定型）」など、この作家の根幹」には「未だ触れていない」ながらも「包括的実証的にその妙味・特徴について論じたのは、これが最初<sup>9)</sup>」との指摘がある。確かに、句の「打ち違ひ」や「續」、先行作品の「突然」の挿入や「變形して引用」する点などは、俳諧連句の方法と関連して分析すべき部分を、既に示唆しているといつてもよい。

こうした西鶴の文体や文章の特質は、特に戦後の談林俳諧研究の進展を経た後の西鶴研究において「俳諧的」等の用語で「評価」されるようになる。今日から見れば、西鶴の手法の本質たる俳諧に関連づけられない研究こそが未熟であると、逆に指摘されるだろう。だが、戦前の研究書、教科書や指導書等では、「近代小説的方法の進化」論的な文学史観により、近代小説の「先駆的作品」としての江戸時代の「小説的」作品の性質が評価されており、西鶴作品の場合も「文学」の性質として「小説」の文章の特質さが指摘されている。それらは〔2〕以降の「文学教育」志向の「西鶴」観の傾向とも共通する。

## 二 近代的作家観・作品観の定着と、教材化の志向

昭和初期の〔3〕の時期までに、西鶴のテキストの普及や文学的研究が引き続き進展する一方、国語科教育学の指導方法論の理論的な研究も進んだ。全文の通読を重んじる芦田恵之助『讀み方教授』（大5）、作品本文の読みの展開を重視するセンチテンス・メソッドの垣内松三『國語の力』（大15）、主題・構想・批評の形象作用を解釈として捉える西尾実『國語國文の教育』（昭4）等である。国文学研究と国語教育及び「国文学史」と近世文学作品教材に

関して、垣内松三『國語教授の批判と内省』<sup>11</sup>では、次のような見方が示されている。

・一茶に連る『ユーモア』、芭蕉その流れに傳はる『寂』、巢林子の跡を嗣ぐ『慰み』は、いづれも隔期的に出現したけれども、こゝに胎藏されたる眞實（誠實）の心の近世的色彩を帯び来つたものである。唯我が近世史は文學の生立に幸福な條件を具へて居ない。精神的にも政治的にも經濟的にも階級的にも地理的にも分裂して居る。我々の明かにしなければならぬ主題は、考證的態度と鑑賞的態度の形式的對立ではなく、認識と味識との論理的關係の考察である。（中略）この機会に際して文學形象の味識の作用を考察して、日本文學研究の論理的基礎を確保しなければならぬ。

・日本文學の研究、國語教育の實際に於ける混沌は對象の統一を確保しないためである。唯一の學問的研究である文學史が名所圖繪的であり、國語教育の態度が案内者的であるのはいふまでもないことである。

・類型に依る統一に據ることなく類型を産出する必然的なる要求に基いて、文形學詳しくいへば文學の形象の研究を求めなければならぬ。

（「國文學の體系」）

垣内の言説には、文學研究と國語教育の両面において、作品の史的發生に沿つた「名所圖繪的」な羅列を「案内」するだけの従來の國文學史の態度は不充分であり、文學作品それぞれの形象の「味識」こそが論理的基礎として求められるとする、強い主張が窺える。このような考え方が影響を増し、「3」の昭和初期頃の國語教科書や指導書等に見られる解説は、それまで以上に文學研究と國語教育の形象分析との双方の成果が反映されたものに変化している。「西鶴の小説」作品の場合、既に幾つかの作品が複数の國語教科書に採用されているが、この時期には國語「教材」のイメージが定着しつつある「世界の借屋大将」「大晦日は合はぬ算用」など、教材採用における一種の「定番化」が起り始めている。

その後、昭和六年の中学校教授要目改正で「國文學史」科目が再び制度的に國語科に復活する<sup>12</sup>。この時期の文學觀は、江戸時代以前の「雅」「俗」の文學觀からものはや遠く隔たっており、「古典」觀そのものが著しく変化している上に、大正期を経てある種「より修正された」西鶴の「文學」のイメージと文學史的位置づけが起こっている。

その影響を受けて、芭蕉・近松・西鶴をも含めた前近代（非「近現代」）の「文学」作品が、「現代文」に対する「古典」という枠組みに入る、という状況に至るとみられるのである。当時の国語科教科書の指導書の「西鶴」に関する具体的な解説例を、以下に見ることとする。

G・浮世草子は大體三種に分れる。一は好色物であり、一は町人物であり、一は武家物である。（中略）好色物から彼は町人物と武家物とに展開した。（略）〔國文學史總説〕二二一―二二三頁

・西鶴の全集、傑作集、註釋書として信用出来るものは 一、西鶴全集（博文館、帝國文庫本）

一、西鶴文集（紅葉、露伴編）／一、同（有朋堂文庫本）／一、西鶴全集（古典全集本）／

一、西鶴好色物全釋（岡部美二三著）／一、西鶴論講、好色一代男（三田村鳶魚編）等がある。

・西鶴の研究としては（明治以後）○西鶴是非（西鶴全集上巻）（渡邊乙羽）○井原西鶴（角田柳作）○井

原西鶴（列傳體小説史）（水谷不倒・坪内逍遙）○五人女に見えたる思想（近代文藝の研究）（島村抱月）○

風雲録（雪の巻西鶴論）（同上）○蝸牛庵夜譚（瑣言、西鶴の花押他三篇）（幸田露伴）○井原西鶴（文章世

界、近世文豪評傳の一）（佐々醒雪）○西鶴の研究（文章世界新緑號）（河井醉茗）○近松と西鶴との比較

（文章世界菜花號）（正宗白鳥）○井原西鶴（國民之友）（幸田露伴）○俳人としての西鶴（近松研究の序

篇）（前島春三）○元禄文學と井原西鶴（新國文學史）（五十嵐力）○西鶴の新研究（鈴木敏也）○西鶴記

念號（早稲田文學）○元禄文學號（國語と國文學）○上方文學と江戸文學（藤村作）○井原西鶴（片岡良

一）○西鶴に就いて（改造、九卷五號）（正宗白鳥）○西鶴武家物研究（日本文學講座）（片岡良一）○西

鶴町人物研究（同）（同上）○西鶴好色本研究（同）（山口剛）等が優れてゐる。

（平林治徳編『女子國文大綱備考 卷九』「蚤の籠ぬけ」解説、立川書店、昭5・12）

大阪府立女子専門学校教授で国文学者の平林治徳によるG『女子國文大綱備考』は、高等女学校国語教科書『女子國文大綱』（立川書店）の教師用指導書であり、引用される「國文學史總説」とは、大正〳昭和初期に近世文学作品の「古典」教材化を進めた代表的な近世文学者の一人、藤村作の『國文學史總説』（中興館、大15・3）第四篇江



戸時代の「三、假名草子と井原西鶴」の本文である。この書を含む一覽の「全集、傑作集」等のテキストや「註釋書」、諸研究書や評論類は、昭和五年頃までに刊行された諸文献である。明治期の乙羽・柳作・露伴・白鳥から大正期の鈴木敏也・藤村作・片岡良一・山口剛に至る研究の推移が見られ、博文館の帝國文庫本や大正期の『日本古典全集』『有朋堂文庫』等の古典叢書等が、既に一般的に普及し、解説に影響を与えていることも窺える。

日西鶴の草子は二十餘種。何れも簡短な小話を集めたもので、人間よりは事件或は社會の風俗を巨細に描くといふ方面に力を盡してゐる。そして後年の「永代藏」以下の者に至つては、西鶴の思想が更に變化して、稍々老成人の態度がある。勿論かの關達な風を失つてないが、なほ貨殖の道を説いたり、大晦日に狼狽する様を嘲つたり、二日酔の頭痛を笑つたりする所は、さすがに五十近い老翁の酸いも甘いも知りぬいた異見といふ風が見える。その文章に至つては何人も企及し難い長所をもつてゐる。その簡潔で奇警なことは前後に比類がない。若し國文學史上に強ひて類似を求めるならば、唯清少納言の枕草子がやゝ似てゐるであらうか。それすら西鶴ほどに警句に富んではゐない。これは勿論西鶴その人の天稟の才でもあるが、又俳諧から得た教養に負ふ所が多い。されば、西鶴の文は一種の俳文であると思つて差支がないと思ふ。(第二節)

(佐々政一「西鶴と近松」、光風館編輯所編『中學國文教科書教授備考 卷十』、光風館書店、

昭7・11修正三版 ※大15・4初版)

『浮世草紙は現代を描寫したる所謂寫實小説の意味である。而して、その代表作家は、實に大阪の井原西鶴のその人である。西鶴が俳諧を西山宗因に學んだことは既に説いたが、彼は檀林派の高足逸才として仰がれたが、その性格は俳諧に終始すること能はず、四十餘歳にして小説に轉向し、つひに浮世草紙の作者として文名を一世に轟かせた。その作品は(中略)三期に分れた所以は、西鶴その人の年齢がしかせしめたのであり、反面には西鶴が絶えず題材の變化と時流の赴くところを洞察するの明があつたことを物語るものである。

(丸山林平『參考中等國文學史』、目黒書店 昭10・5)

日 指導書の教科書『中學國文教科書 卷十』の「西鶴と近松」は、國文學者で俳人の佐々政一(醒雪)の『近

世國文學史」(太陽堂、大12)の本文の一部を収録した教材である。またI『參考中等國文學史』は、東京高等師範学校教授の丸山林平が「拙著『中等國文學史』なる教科書を生徒に教授するに當りて、多少の參考にもならうかと」[見出しの部分だけについて、解説的に述べ]、「(はしがき)た、とする。いづれも、かつての『国文学史』的な内容の記述でありながら、前掲のAとEなどと比べてもかなり論調が変化し、西鶴作品の文学性が評価されていることに注目できる。西鶴への評価は、単に「卑猥なる」好色本の作家観に留まるものではない。「年齢」を経て「後年」の作品に至るにつれての「題材」と「思想」の「變化」、作者の「老成」を見ようとする点、「俳諧から得た教養」を持ちながらも「俳諧に終始」できず「小説に轉向」した作家観、といった、作家西鶴の一種の「成長譚」的なストーリーが、次第に共通認識として定着してきている。これらには、片岡良一『井原西鶴』に代表されるような当時の西鶴研究の総合的成果の影響があることが考えられる。次に掲げる例も、この時期の教科書の指導書の記述である。

J 井原西鶴 キハラ サイカク。松壽軒、鶴永、西鵬なども號した。

大阪の人、初め西山宗因に談林派の俳諧を學び、或る年住吉社頭に於て二萬三千句の獨吟をして人を驚かせ二萬翁、二萬堂の稱を得、延寶五年俳諧大矢數おほやかずに一日に千六百句、八年には一日四千句を吐いて實に談林派の鬼才と稱せられ點者として名を成した。然し彼の本領は小説にあつたので天和二年好色一代男を著すや浮世草紙の範として非常な好評を博し、此の頃より俳諧を去つて専ら小説に傾き好色二代男、好色一代女等を次ぎく著した、貞享年間好色本の禁止に逢つて、筆を武家物に轉じては男色オナメダ六鑑、武道傳來記等を出したが、之は西鶴の得意とする所でなく、再び町人物に移つて商人立志傳とも云ふべき日本永代蔵や、町家の大晦日の世相を取つた世間胸算用を出して、京坂讀者の喝采を博した。かくて近松門左衛門の浄瑠璃と共に元禄期の二大文豪の名を擅にし、元禄六年五十二歳で歿した。俳諧では「長持に春かくれ行く衣がへ」「大晦日定めなき世の定めかな」など有名である。

(作者)

Jは金子彦三郎監修の高等女学校用国語教科書『昭代女子國文』(光風館書店、昭8・8初版)の、教授指導書

『昭代女子國文修正再版用教授要領』（※以下、「教授要領」と略記する）巻八（昭9・10）と巻九（昭9・4）に掲載された西鶴についての解説である。『昭代女子國文』には、巻八に「七 孝と不孝の中にたつ武士」（西鶴俗つれづれ）巻四の一、巻九に「一七 代筆は浮世の闇」（『万の文反古』巻三の三）がそれぞれ教材として採用されており、「教授要領」では「作者／出典／作者の意圖／他課への連絡／力點／節意・構想／解釋／鑑賞批評／挿畫に就いて」の各項目が解説されている。

解説には「作物には前記の外、「本朝櫻陰比事」「西鶴置土産」「俗つれく」「萬の文反古」等が世に用ひられて居る」ともあり、『西鶴諸国ばなし』『武家義理物語』等の作品名は省略されている。比較的早くから「文学」的な評価が高かった好色物や晩年作を挙げた箇所に、当時の観点による作品の位置づけや評価の概観も窺える。また、傍線部の「本領は小説」「武家物……は西鶴の得意とする所ではなく」「元禄期の二大文豪」といった表現も、当時の文学史観・西鶴観の反映がみられる部分である。

形象と解釈に関する前掲の国語教育指導方法理論等で指摘されていた、段落構成の分析方法の影響は、この解説の示す作品の意図や力点、構想・解釈・鑑賞批評等の要点に垣間見られる。例として、巻九「代筆は浮世の闇」の解説を次に掲げる。

#### 「節意・構想」

第一節（初く八八頁十行）此の手紙を認めるに至つた理由を述べる。

第二節（八八頁十一行〜終）因果應報歴然として我が身を襲ふ恐ろしい事實を詳細に記述して徹底的に懺悔する。

第一節（八八頁十一行〜九〇頁九行）侍を欺いて大金を盗んだこと、其の侍がどこ迄も自分の盗めることを主張し終に恐ろしい恨み言葉を残して死んで行く顛末。

第二節（九〇頁十行〜九一頁六行）早くも蒔いた因に對する果を見なければならぬやうになつた。其の第一として金を盗んだといふ噂によつて排斥され嵯峨に移住したが、其の金は盜賊に取られてしまつた。

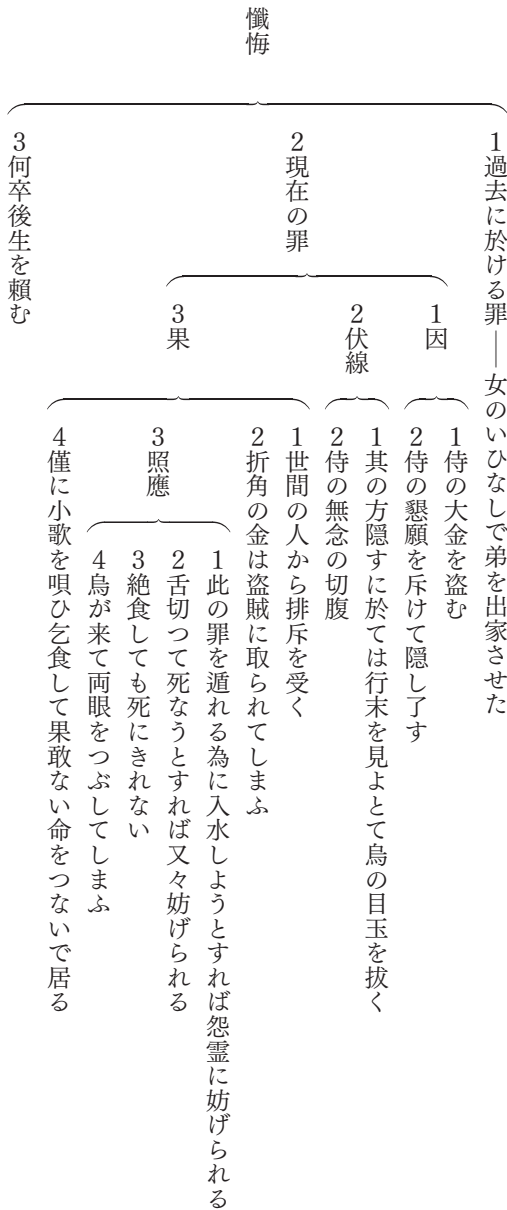
第三節（九一頁六行〜九三頁一行）恐ろしい果報は死なうとする自分をさへ自由にさせず、さんざんに苦し

め抜く。

第四節（九三頁二行―十一行）果ては鳥が出て来て両眼を突いて盲目にしてしまった。さうして今は僅に小歌を唄ひ乞食して其の日を送つて居る。

第五節（九三頁十一行―終）懺悔し且佛心を起して将来を頼むことを叙して終つて居る。

〔構想〕



〔鑑賞批評〕

・一 因果應報の恐ろしい事實が極めて明るく順序良く記述されて居る。「鳥を一羽生きながら持ち来り其方隠すに於ては行く末を見よ」云云は一の伏線とも見られ、其の照應（中略※本文引用）。人は死を以て萬事を解決する

ものと心得易いが、死は必ずしもその役目を果たすとは限らない。それでも死を欲して死に得る人はせめても幸福者である。運命は時には人に死を與へずして死に勝る苦痛を與へる。不具疾病の為に幾度か死を覺悟して死ねない人、若し其の人達が以前に悪事があつたとすれば自他共に之を因果應報に結びつける。若し其の理を是認するとせば本文の如きはよく其の道程を解き得たものと云ふべきであらう。

・二 斯様な殘忍な内容感情を強々と刺戟する文に拘はらず其の記述の飽くまで平靜にして落つきはらへる點に注意すべきである。かゝる際に生徒達が無闇に用ひたがる「あはれ」「あゝ」などの感動の語は一つも使用されて居ない。而して其の恐ろしい因果律に縛られて行く情景はまざぐと展開されて些かの淀みがない。徒らに感情的語を濫用して一人よがりの文でなく自らは感情を抑制しつゝ讀むものをして無限の感慨を抱かしめるのを以て上乘の文とするなれば本文の如きは蓋し之に類するものであらう。

「節意・構想」は、節と段落に分けた文章全体の構成を図式化し、「懺悔」全体の形象がどのように組み立てられているかを理解するのに役立つ解説である。「鑑賞批評」の「二」では内容面、「二」では形式面、すなわち主題と表現に関して、やや感想的な意見も交えてその特質を記述している。「殘忍な内容感情」と指摘される通り、「手紙」の書き手の欲心と悪事、侍の死と怨念の報復といった、現代から見てもかなり陰慘な印象の強い「悪因悪果」の話であり、「世界の借屋大将」のようなユーモラスな風合いの定番教材にはなりにくかったとみられ、この話の教材採用例は實際少ない。だが、このような作品を「文学作品」教材として扱うにあたり、「一」は段落の構成の整理に留まらず、登場人物の行為や心理について、若干倫理的かつ教訓的な観点も含めた教材観を示している。興味深いのは、この教材観に基づきつゝ、「二」の表現面で作文指導にも配慮した指導観が示されている点であり、特に生徒の文章作成時の感情表現や用語の用い方等に役立てるよう注意した言及がみられる。

西鶴「小説」獨特の文体や表現の特質はこの後、戦後の教科用指導書にも多く指摘され、本文読解の着目点となり、作家論的部分以上に指導内容として注目されていくとみられる。だが先述のとおり、西鶴の文体の「俳諧的」性質は、戦前の文献においても言及はされるものの、近代小説からみて未発展的・未成熟的・前近代的といった、

や否定的なニュアンスで評価される例が多く見受けられる。『大坂独吟集』の西鶴百韻を昭和六年頃に山田孝雄・小宮豊隆・岡崎義恵等が輪読し、対談的にまとめた『西鶴俳諧研究』（改造社）は、昭和十年十月によくやく刊行された。その紹介文である頼原退蔵「新刊紹介」（『國語國文』第5巻11号、昭10・10）が、西鶴の俳諧は「研究された事がない」とし、「西鶴の小説そのものだけでは、近世文藝の成長を正しく知る事は出来ない」、と指摘する時代でもあった。「俳諧的」性質の評価の問題は、それ以後の研究に引き続き持ち越されている。

井原西鶴という作家とその作品の評価は、十九世紀から二十世紀への作品受容と文学研究の進展の中で著しく変遷し、二十一世紀の現在も推移し続けている。読者としての諸研究者の作品への接し方、読み方、という享受のあり方が、解釈の立脚点でもあり、文学研究と国語教育に影響を与える点で、研究史上の問題の前提となる。近代以降の教科書教材に採用された作品の位置づけには、このような受容史の問題が絡んでいる。

西鶴作品は近世前期に成立し近世期に消費し尽くされたのではなく、近代以後に近代文学の視点で再発見された後、近世的な性質の再評価と読み直しがなされた。その意味では、概して「二十世紀に見直され受容された作家と作品」であり、読者の享受の仕方が作品の価値に大きく影響しているともいえる。比較的急速に、数十年間で進んだ研究と作品評価の動向を背景として、活字翻刻テキストが普及し国語教材となっていた点においては、「国語教科書教材として扱われた日本の前近代作品の中の、比較的新しいジャンル」だったことになる。それでは、文学や文化として今後も享受され作品が生き続けるためには、何が必要だろうか。今日から見れば、近世的な読みと近代的な読みのいずれもが、過去から続く経緯である。一方の方法をもう一方の方法が仮想敵視するまでもなく、現在の読者はどちらの方法の視点をも用いる位置にいる。文学研究と国語教育のいずれにおいても、将来的にも常にその「現在」の読者が様々な角度から作品に関わり続け、読み、問い続けるという、享受の活動と言語の作用そのものが重要であり、それが今後のさらなる新しい読みの視点を拓くことになるのではないか。

注

- (1) 堀切実「西鶴と古典教育——『本朝二十不孝』教材化案——」(『西鶴と浮世草子研究』1、笠間書院、平18・6) 卷末教材一覽
- (2) 拙稿「戦前国語教材の西鶴作品教材本文——町人物の教材化とテキスト受容——」(『文藝と思想』78、平26・2)
- (3) 五十嵐力監修『省勞抄 卷一 純正國語讀本參考書』(早稲田大學出版部、昭4・12)「小序」に、「純正國語讀本」を用ゐて下さる學校の先生方の教授準備の御苦勞を、これによって少しでも省きたいといふ心であります。「本書は「抄」の名の示す如く「要旨」「解題」「釋義」「批評」「餘訓」等に関する思寄を極めて大まかに記し留めた「抜書」であります(以下略)」とある。
- (4) 拙稿「西鶴「古典」化の経緯——教授要目改正と『万の文反古』教材化——」(『文藝と思想』79、平27・2)
- (5) 拙稿「西鶴作品教材化の背景と「古典教育」観」(『文藝と思想』76、平24・2)
- (6) 八木雄一郎「中学校教授要目改正(1911(明治44)年)における「国文学史」廃止の意味」(筑波大学大学院人間総合科学研究科学校教育学専攻「学校教育学研究紀要」1、平20)、「中学校教授要目(1902(明治35)年)の制定に伴う「国文学史」観の確立・明治20年代と30年代の「国文学史」テキストの比較から」(『信大國語教育』20、平22・11)
- (7) 竹野静雄『近代小説と西鶴』(新典社、昭55・5)
- (8) 拙稿「戦前の国語教科書と西鶴浮世草子——「蚤の籠ぬけ」教材と作品受容——」(『日本文学』63卷1号、平26・1)
- (9) 竹野静雄監修『西鶴研究資料集成 第二卷 明治34年〜明治45年』(クレス出版、平5・12) 解説。F本文もこれに拠る。
- (10) 田近洵一『現代国語教育史研究』(富山房インターナショナル、平25・7)「I 昭和前期・国語教育の研究」
- (11) 垣内松三『國語教授の批判と反省』(不老閣書房、昭2・8)
- (12) 八木雄一郎「中学校教授要目改正(1931(昭和6)年)における教科内容決定の背景——現代文」の定着に伴う「古文」概念の形成」(『国語科教育』65、平21・3)